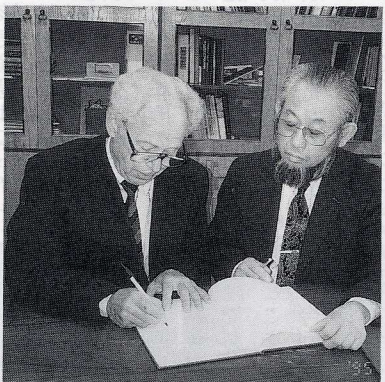


原爆放射能医学研究所

ミンスク遺伝性疾患研究所と国際交流協定締結



佐藤 幸男 (原爆放射能医学研究所長)

ミンスク研究所の紹介

私は、旧ソ連邦の宗教団体(ロシア正教会)の招待で、一九九〇年に初めてチェルノブイリ事故後の調査に赴き、以来、日本の民間団体の支援、最近では文部省科学研究費補助金(国際学術研究)の支援を受けて、十数回現地を訪れた。特に、奇形の研究を専門とする数少ない研究機関であるミンスク遺伝性疾患研究所を訪問し、ヒト胎児の剖検資料の検証や広島原爆による被災の資料の紹介を行ってきた。

現在も、各機関との協調のもとに、現地での調査や旧ソ連邦からの医療関係者の研修・交流を行っているが、次に、チェルノブイリ核被災の最も酷しかったベラルーシ共和国で、胎児・新生児の奇形に関する調査を行っているミンスク遺伝性疾患研究所との研究仲間交流協定について紹介したい。

一九八六年に発生したチェルノブイリ原子炉事故による放射能の急性障害及びそれに続く後障害についての調査・研究を、公的機関や民間支援団体の依頼、支援をうけて、これまで多くの当研究所員が現地を訪れた。

あなたはチェルノブイリを「Open Laboratory」と考えよう

ミンスク遺伝性疾患研究所は、ベラルーシ共和国で唯一の遺伝性疾患に関する研究所で、チェルノブイリ事故前から全国の先天異常児登録モニターングシステムを整備確立してきた。

従って、そこにはチェルノブイリ事故前と事故後の放射能汚染地区と、比較としての対照地域における先天異常や、その他の疾患の経時的な資料が収集、蓄積されている。それらの資料の解析には我々も共同研究者として関与し、その結果は研究論文として発表されている(文末参照)。

広島の場合、原爆による初期の障害、即ち胎児の流・早・死産や奇形の資料収集は、当時の混乱期のために十分に行われていない。広島や長崎で公認されている先天異常は小頭症だけである。他の種々な致死性の先天異常の系統的な追跡調査は不可能な状況であった。

調査でベラルーシの現地を訪れている時に、ヨーロッパのジャーナリストから「あなたはチェルノブイリを「Open Laboratory」と考えて来ているのか？」と質問された。私は、「広島で学べなかったことを学びにここに来ている」と答えて、彼の共感を得ることができた。

核の被災について、広島を経験はきわめて重要な位置を占めているが、すべての被災に all mighty と言うわけにはいかない。換言すれば、放射能による被災は、それが生じた地域社会の政治経済状況、栄養や環境汚染などの他の要因と無縁ではあり得ない。種々な疾病と放射能依存性の解析を行う場合にも、放射能は大きな環境要因の一つとして考慮されるべきであると考ええる。

結ばれた友情の絆

ミンスク遺伝性疾患研究所長のゲナダイ・ラジュク教授は、これまで二回我々の研究所を訪れ、情報や意見の

遊び心

文・正藤 英司 (中央廃液処理施設)

新キャンパスの用地は、二十数年前までは畑、田圃の、里山を主とした田舎環境に満ちた地域であった。しかし、その頃から開発の手が入り、造成、校舎の新設、道路敷設そして移転を繰り返して、平成六年度に統合移転が終了した。

用地のほぼ半分は昔からの松林を主とする山林で、半分はアカデミック地区と称する地域で構成されている。

キャンパスの自然環境は、人為的或いは自然環境の変化により急速に変化してきた。しかし、急速な環境変化にもかかわらず、山野草・動物等貴重生物は枯死・絶滅寸前の状態で残存していた。

枯死・絶滅寸前の環境を守るためにも、これからは自然環境の整備・保護と適切な維持管理の施策が重要であると考ええる。キャンパスを中心とした植生分布などの自然環境調査を行い、その成果をキャンパスの自然環境の蘇生・創造・保護に生かしたい。さらに、その環境を多目的に有効利用するとともに、地域に開かれた憩いの場を提供したい。そこで考えたいのは、「遊び心」である。

筆者は、統合移転先の東広島キャンパスで枯死・絶滅寸前の状態で残存している自然環

境を蘇生・創造する活動・運動を行っている。そこで、その「遊び心」を取り入れたキャンパス整備私案・諸行事について述べることにしよう。

アカデミック地区の中央には、「山の谷川」と言う小川が流れている。その川辺に、荒れた廃棄田圃が残っていた。その地域を、植物分類・生態学の豊原先生と野村正人氏などによる学内ボランティアの協力により田圃、小川、里山を蘇生させ、「生態実験園」と名づけられた。そこでは毎年、田圃では黒米の田植え、稲刈り会、小川では蛍狩り会といった昔懐かしい田舎行事が開催されている。また、附属幼稚園の野外活動(稲刈り)・体験学習(餅つき)の場としても提供されている。

「山の谷川」の川辺に、山ユリ、笹ユリ、山ツツジ、コバノミツバツツジ、リンドウとして卵の花(ツツジ)等山野草が枯死・絶滅寸前の状態で残っていたので、その開花場所、開花期等の確認と増殖・育成・保護等を行っている。

また、数か所残っている竹藪に少し手をいれ、竹林としての保護を行っている。季節には、花見大会・竹の子料理パーティー、附属幼稚園児による笹舟競争などの諸行事を開催している。

キャンパス内の「がら山」及び「山の谷川」の川辺には、昔ながらの湧水が十数か所ある。

湧水は鉄、マンガンを多量に含有しているため赤水となり、水質・景観は良くない。そ

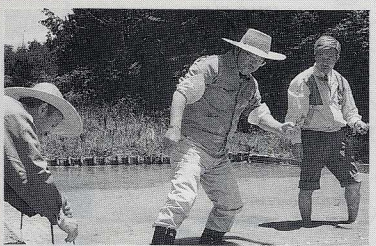
ここで、比較的良質の湧水を開発し、地下水、土壌等の水質・土質調査、湧水の水質改善等についての研究を行っている。その良質の湧水を活用しておいしい水飲み場をつくった。また、散策路近くの廃棄田圃に良質の湧水を引き、菖蒲園をつくった。六月には、二十五種約六百本の菖蒲の花が楽しめることである。

しかしながら、キャンパスは広大な敷地である。定期的な草刈りと草刈り後の草木の適切な処置が必要となっている。そこで、草刈り後の草木を集めて堆肥に利用するとともに、キャンパス内の植生等への施肥等に利用する試行を考えている。

筆者は、大学などの教育・研究機関のキャンパス整備には、このような遊び心を取り入れた、緑と潤いのある、憩いの場を提供できる整備が必要であると考えている。

このような試行を推進するため、地域の地史誌専門家など多分野の専門家の意見・提案を取り入れながら、ボランティアの協力を得て私案を推進している。この試行の成果が、

これからのキャンパス整備の参考になれば幸いです。(しよう・えいじ)



「生態実験園」での学長による田植え会。筆者は左端

参考文献

- (1) ラチュク・G、佐藤幸男ら：ベラルーシ共和国住民におけるチェルノブイリ原発事故の遺伝的影響 広大原医研年報 (34, 171-178, 1993)
(2) 佐藤幸男、ラチュク・G、チャイジュノバ・N、ローゼンソン・R、武市直雄、木村昭郎、加藤修、河石久仁子：放射線による先天異常 チェルノブイリに関するレポート Congenital Anomaly (35, 25-42, 1995) (英文)